**日曜午後例会「瞑想と霊性の生活」勉強会　第１９回　（２０２０年９月２７日）**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**『瞑想と霊性の生活　１』(MEDITATION AND SPIRITUAL LIFE)**

**第１部　霊性の理想　第２章　超意識的経験の理想**

**P42　書物からの知識では不十分である【Inadequacy of book knowledge】**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**（前回の補足）**

「なぜ聖典の勉強が必要か」について補足します。

**パラー・ヴィッディヤーとアパラー・ヴィッディヤー**

ウパニシャドは、「２種類の学問がある。パラー・ヴィッディヤー（parā vidyā）とアパラー・ヴィッディヤー（aparā vidyā）だ」と言っています。

パラー・ヴィッディヤーとは「最高の学問」「偉大な学問」、アパラー・ヴィッディヤーとは「普通の学問」という意味です。

　・ヴィッディヤー＝「学問」

　・パラー＝「最高の」「偉大な」

　・アパラー＝否定の接頭辞、ア+パラー

**なぜ聖典の勉強がパラー・ヴィッディヤーなのか**

この世にはさまざまな学びがありますが「学問」という観点から言えば、たとえば学校の勉強は大事です。勉強して卒業しないと（一般的には）仕事に就けません。また文学や語学など、自分の興味があるものを私たちは勉強しています。そしてそれらはすべて普通の学問（アパラー・ヴィッディヤー）です。では最高の学問（パラー・ヴィッディヤー）とは何を指すのでしょうか？　聖典の勉強です。なぜならそれが人生の目的を満足させるものだからです。

ヒンドゥイズムの考えで、人生には４つの目的（プルシャールタ：puruṣārtha）があるとされています。これはヒンドゥ社会の伝統的な考えで、それについて社会は混乱することなく、古から皆が従ってきました。古代ギリシャ・ローマにも人生の目的についての考察はありましたが、社会の全員に共通する人生の目的をはっきりと決め、それを社会全体で共有し、そして従い続けてきた社会は世界の中でもちょっと特別かもしれません。

それがダルマ、アルタ、カーマ、モークシャの４つです。まずカーマ（kāma）についてですが、これはお金を稼ぐ、家族をつくる、子供をつくる、物質的・知的願いを満たすなど、願望や欲望を満足させることです。ただ、重要なことは、それは非道徳的な方法ではなく、道徳的な方法でなされなければならないということです。たとえばお金を稼ぐことは非道徳的な方法でも可能ですが、それはしてはならないとマヌ・サンヒター（マヌ法典）などの聖典に基準（何が正しくて何が正しくないか）があり（これは出家者ではなく家住者についての助言です）、家住者はそれに従うのですが、これがダルマ（dharma）にあたります。ちなみにこのダルマとは宗教という意味ではありません。

バガヴァッド・ギーターの中にその言及があります。シュリー・クリシュナはご自身をいろいろなものに例えていましたね。たとえば「私は動かないものの中のヒマラヤである」（10-25）、「私はパンダヴァの中のアルジュナである」（10-37）、「私は人々の中の王である」（10-27）、「私はすべての水の中の海である」（10-24）などと宣言していますが、その中に、「ダルマ　アヴィルッダ　カーマ」と言っている節があります（第７章１１節）。意味は「ダルマに矛盾しないカーマ」。つまりシュリー・クリシュナは「ダルマに反していないカーマは私である」と言っているのです。

ですからダルマに反していなければ、お金を稼ぐことや子供をつくることはいやしいことではありません。またそうでなければ、誰がお金を稼がない子供やお年寄りや女性（昔は女性は滅多に職業に就けませんでした）やお坊さん（インドの僧侶は日本と違って金銭を稼ぐことをしていません）や貧乏な人や身体が不自由な人々を養いますか？　また家族をつくらなければ伴侶を持たない僧は一代で終わってしまうではありませんか？　出家僧も親から生まれているのです。そして彼らを家住者がサポートせず、誰がしますか？　家住者にとってはお金を稼ぐことも家族をつくることも必要であり、それは社会のためでもあるのです。つまりカーマは絶対必要だということです。しかし非道徳的な方法では稼がないでください。それは必ず覚えておいてください。道徳的な方法でカーマを満たしてください。

ですからプルシャールタにおいて、最初にくるべきものがダルマです。そしてカーマ、アルタ（artha）、最後がモークシャ（moksha）すなわちムクティ、解脱で、それがパラマ・プルシャールタ（人生の４つの目的の中で最も偉大なもの）です。ですからそれについての学問がもっとも偉大な学問（パラー・ヴィッディヤー）です。モークシャについては聖典にいろいろと書いてあるので、聖典の勉強がパラー・ヴィッディヤーなのです。

もしそれを学ばなかったらどうなるのでしょうか？　生まれ変わりの連続です。輪廻転生は終わりません。苦しみはなくなりません。少しの楽しみ、たくさんの苦しみ悲しみという状態が繰り返し続きます。ここに人生をまとめた一冊の本があるとします。１つ１つの章が１つ１つの人生です。しかし章のテーマがすべて同じだったら、１章を読み終えて新しい章に入っても内容は前の章と同じだったら、それでもあなたはその本を読み続けたいですか？　内容は「少しの楽しみ、たくさんの苦しみ悲しみ」、それが続くのです…

解脱とは、もうそんな本は読みたくない！　そんなことは繰り返したくない！　輪廻転生はやめたい！　もうやめよう！　それが解脱です。解脱は変なものではありません。口や頭ではなく、はっきりと、少しの楽しみとたくさんの苦しみ・悲しみ・恐れ・心配が繰り返されるだけだとわかったとき、そのとき解脱します。解脱して至福を得ます。

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**（今回の勉強）**『瞑想と霊性の生活』p42L1　**書物からの知識では不十分である**

［＊本文文章は前回のデータに掲載されています］

（ここから前回の「書物からの知識では不十分である」についての話の続きです）

**聖典を言葉だけで理解すると、パラー・ヴィッディヤーもアパラー・ヴィッディヤーとなる**

しかし厳しく吟味して考えれば、パラー・ヴィッディヤーもアパラー・ヴィッディヤーになります──これが今日のテーマです──どんなにウパニシャド、バガヴァッド・ギーター、聖書、お釈迦様の言葉etc.の勉強をしても、アパラー・ヴィッディヤーにすぎない、という可能性もあるのです。私たちが今学んでいる節のタイトルは「書物からの知識では不十分」です。悟るための実践をせず、言葉だけで、頭だけで聖典が言っていることを理解しているあいだは、アパラー・ヴィッディヤーにすぎません。

シャンカラーチャーリヤが作った『バジャゴーヴィンダㇺ』という有名な賛歌では、

*bhaja govindaṁ bhaja govindaṁ*

*govindaṁ bhaja mūḍha-mate/*

*samprāpte sannihite kāle*

*nahi nahi rakṣati ḍukṛṅkaraṇe//*

と歌われています。*mūḍha-mate*（ムーラ・マーテー）とは「無知がある人」「無知を持っている人」（ムーラ＝知識がない、マーテー＝その種類の考え）。*ḍukṛṅkaraṇe*（ドゥーキンカラネー）はサンスクリット語の文法の格言（aphorism）のことで、ここではドゥーキンカラネーが学問のシンボルとして使われています。

『バジャゴーヴィンダㇺ』の歌詞の意味は、「学者はドゥーキンカラネー（学問）をたくさん勉強していますが、学問の勉強だけで、彼が死ぬとき（＝*samprāpte sannihite kāle*）救われることはありません。ではどうしたらよいですか？　神についてずっと考えてください、瞑想して下さい、神の名前を唱えてください（＝*bhaja govindaṁ*）」、それがシャンカラーチャーリヤの言うことです。

**①ナーラダの例**

昔は多くのウパニシャドがありましたが散在消失し、今では１０数のウパニシャドが残るのみとなりました（それらについてシャンカラーチャーリヤの注釈があります）。中でも大きなウパニシャドとして残っているのが、『ブリハドアーランニヤカ・ウパニシャド』と『チャーンドッギャ・ウパニシャド』です。これは『チャーンドッギャ・ウパニシャド』に出てくるナーラダと聖者先生との会話です。ナーラダの名前は知っていますね？　どのような方でしたか？

（参加者）リシ。

リシにも、ラージャルシ、ブラフマールシ、デーヴァールシと種類があります。デーヴァ（神）とリシ（聖者）を合わせてデーヴァールシ。ナーラダがそうでした。神ですけれども聖者でした。

しかしナーラダは最初からデーヴァールシではありませんでした。デーヴァールシになる前、たくさんの勉強をしました。すべてのヴェーダ──リグ・ヴェーダ、ヤジュール・ヴェーダ、サマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダ──、イティ・ハーサ、歴史、プラーナ、ヴェーダの文法、さまざまな儀式、科学、経済学、倫理学、天文学、兵法（戦の仕方）、踊り、歌、それらについてたくさん勉強しました。ですけれども苦しみ悲しみはなくならなかった。しかし聖典にははっきりと悟ったらそれらは完全になくなると書いてあります。なぜ私は聖典を勉強したのに苦しみ悲しみはなくならないのか。ナーラダは聖者サナトクマラの元へ教えを乞いに行きました。

サナトクマラは、「ナーラダ、あなたは何を勉強してきましたか？　あなたが勉強したものは言葉なのです。すべての聖典は言葉の羅列ではありませんか？　言葉の勉強だけでは苦しみ悲しみはなくなりません」と言いました。

「どんなに聖典の勉強をしても、それが言葉の勉強だったら苦しみ悲しみはなくならない」、それがポイントです。どんなに賢くて有名な学者でも、彼らの生活を観察すれば苦しみ悲しみは絶対になくなっていないとわかります。ではどうしたらよいのでしょうか？　サナトクマラは言いました、「ブラフマンを悟らないと、アートマンを悟らないと、苦しみ悲しみはなくなりません」。それが結論です。

**②学者と船頭の話**

『ラーマクリシュナの福音』にも似たような話があります。その学者には勉強をしたがゆえのうぬぼれやエゴがありました。一方の船頭には学がなかった。おそらく貧乏で勉強するチャンスがなかったのでしょう。そして舟の上で、学者は自慢げに船頭にたずねていました──「あなたは哲学を勉強しましたか？」「していません」「あなたは人生の２５％を無駄にしましたね」。「あなたは文学を勉強しましたか？」「していません」「あなたは人生の５０％を無駄にしましたね」。「あなたは科学を勉強しましたか？」「していません」「あなたは人生の７５％を無駄にしましたね」。そのとき突然暴風が吹き、舟が沈みそうになりました。船頭は学者に聞きました、「あなたは泳ぎ方を勉強しましたか？」「していない！」舟が沈んだら死んでしまうでしょう？　「あなたは人生の１００％を無駄にしました」、と船頭は学者に言いました。［👉『ラーマクリシュナの福音』371頁　2014年版］

聖典の勉強が死ぬとき学者を助けることはありませんでした。死への恐怖が生じた、ということです。しかし本当に聖典の言うことが身についていれば、本当の信者であれば、死ぬときに神のことを考えます。その武器を持って死に立ち向かうことができます。『輪廻転生とカルマの法則』（協会出版）の第1章にありますね？　「よく死ぬとは、知識をもって勇気をもって死に立ち向かうことだ」と。しかしその学者には武器がありませんでした。そのことが問題でした。

**聖典の勉強は実践へのステップ**

ですが、人生にとって聖典の勉強は無駄ではない、ということはもちろん忘れてはなりません。前回、なぜ聖典を勉強するのか、その目的について話しましたね？　聖典には、神/真理をどのようにして悟るか（悟りの方法）、真理とは何か、［＊他に、人生の問題にどのように立ち向かうか、安定した幸せはどのようにして得られるか、悟りの方法は何か、実践の障害は何か、悟りの結果についての知識など］などが書いてあります。それらを学ぶという意味では、聖典の勉強は最高の学問、パラー・ヴィッディヤーなのです。

『福音』に「手紙を捨てた男」の話がありますね。──儀式に供えるための品々が書かれた親戚からの手紙を、彼はなくしてしまいました。それを何人かで一生懸命に探し、ようやくのことで見つけたとき、彼は集中して手紙の内容を読んで、どれくらいのギーを買い、どれくらいのお菓子を買い、どれくらいのグラスフェッド・バターを買えば良いのかを理解すると、あれほど懸命に探していた手紙を捨てました。そして買い物に行って、必要な品々を買って、親戚に送りました。［👉『ラーマクリシュナの福音』467頁ほか］

手紙を探し、見つけたら集中して読む、それが聖典の勉強です。そのあとは何ですか？　買い物と送る、それが実践にあたります。私たちは目的（悟り）のために、まずギャーナ・ヨーガ、バクティ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、カルマ・ヨーガ、バガヴァッド・ギーターの１８のヨーガなどを１つ１つ勉強し、それに従います。そして、手紙を読んだだけでは儀式は実行できないように、勉強だけでは悟れないので、実践をします。

『福音』には「王様とバーガヴァタムの学者」の話もありますね。──王様はバーガヴァタムを勉強したいと考えて、バーガヴァタムの学者に来てもらって勉強を始めました。学者がすべて説明したあと、最後に「王様、理解しましたか？」と聞くと、王様は「最初はあなたが理解してください」と言いました。次の日も、その次の日も、勉強が終わったときに王様にそうたずねると、必ず王様は「最初はあなたが理解してください」と言いました。学者は家に戻るとき毎日考えました、「どうして毎回『最初はあなたが理解してください』とおっしゃるのだろう」。普通、生徒は先生に言わないでしょう？　「あなたが理解してください」とは。なぜならとても失礼ですから。そして突然学者は気づきました。バーガヴァタムの結論は「放棄」です。私はそのことについて話をし、説明をしているけれども、実践をしていないと。それを理解した学者は家族から離れました。離れる前に、王様に使いを出しました、「王様、あなたがおっしゃっていたことが今わかりました」。王様はそれを知って満足しました。［👉『ラーマクリシュナの福音』p749, p1004］

『福音』の１つ１つの物語や例は、とても小さいものですが、教えはとても深い…。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの弟子にシュッダーナンダジーという方がいて（イニシエイションはホーリー・マザーからもらいました）、彼は聖典の学者として有名でした。若いお坊さんに聖典を教えたり、スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）の本を翻訳したりもしました。シュッダーナンダジーは、半年間ほどだったか、ラーマクリシュナ僧院の長になったことがあります。そのときには聖典の勉強はせず、朝食後から昼食まで、昼食の休憩後から夕方のアラーティの前まで、『ラーマクリシュナの福音』の勉強をしていたそうです。そして信者からさまざまな質問を受けると、「聞いてください、あなたの質問のすべての答えは『ラーマクリシュナの福音』の中にあります」と言って答えていたのです。

シュッダーナンダジーは最終的にはウパニシャドでもヴェーダーンタでもバガヴァッド・ギーターでもなく、『ラーマクリシュナの福音』だけを勉強していました。『福音』の小さい１つ１つの例や物語が、私たちに突然新たな気づきを与え、それまでの理解をより深めてくれます。皆さん、どうぞそのことをよく覚えて、『ラーマクリシュナの福音』の勉強をしてください。

**宗教と悟りは一緒（Religion is realization.）、だから書物の知識だけでは不十分、実践が大事**

ヤティシュワラーナンダジーの『瞑想と霊性の生活』（p43最後の行）には「*もし神がおられるなら、「彼」は見て触れられるものでなくてはならない。*」とあります。（原著ではP23L9 : *If there is a God at all, He must be seen, He must be felt.*）

大変有名なスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの言葉に「Religion is realization.」があります。意味は「宗教と悟りは一緒です」「宗教の目的は悟りです」、つまり宗教は言葉だけでなく、勉強だけでなく、悟らなければ意味がない、ということです。これはヤティシュワラーナンダジーの言葉と同じですね。

またヴィヴェーカーナンダは「神の信者になっても、神を悟らなければ神を信じていない人と同じだ」とも言いました。いくら神がいるとかいないとかの議論をしても、悟らなければその確認はできません、そして確認できないなら神を信じていない人と何が違いありますか？　と言っているのです。もし悟ろうとしないなら、あなたの信仰は深くはありません。確かにあなたに信仰はありますが、とても浅い信仰です。重要なのは、悟ること。そして悟るには何が必要ですか？　書物からの知識だけでは不十分です、実践が大事です。

**聖典を言葉だけ、頭だけで理解していると**

言葉だけ、頭だけの知識では①信仰が浅いままです。②苦しみ悲しみもなくなりません。それに次のような問題も起こり得ます。

**③頭だけの理解では混乱がなくならない**

「神はおられる」という理解が頭の中の理論だけにすぎなければ、もしその反論、「神はいない」という強力で隙のない論理的な意見に出会ったときに、自分の理解が揺らぐ可能性があります。つまり、信仰の基礎が理論だけだったら、別の理論によって別の結論に導かれる可能性があるということです。

頭だけの理解ではつねに混乱があります。「神はいない」という内容の本を読んでは「そうかもしれない」と混乱し、自分の信仰に自信がなくなります。トゥリヤーナンダジーにも1度その問題がありました。信じられないですね。その種類の本を読んで混乱が生じたのです。そのあとトゥリヤーナンダジーはとても困りました。信じられないですね。普通の信者にとって、その種類の本は毒みたい、ヘビみたいです。読まないほうがいい。勉強しないほうがいい。

**④頭で理解するには限度がある**

また、頭の力には限度があります。先月（2020年9月）の『ラーマクリシュナの福音』勉強会でも話しましたが、２００グラムの容量のコップに、1キロの牛乳を入れれば溢れるでしょう？　神の本性は無限です。それを有限な私たちの頭で考えること自体が不可能なのです。アインシュタインやシェークスピアでさえ限度があります。何人も、神/真理を頭だけで理解することは不可能です。ですから頭だけの理解で、1００％を理解したと思うのは愚かなことです。

**⑤知性が不純のままでは神/真理は理解できない**

神/真理を理解するには、力の他に、知性の純粋さも重要です。知性が不純だったら、神や真理という精妙なことは理解できないからです。何でも理解できそうな頭脳明晰な学者や科学者でも、神についての理解はまったくできない、わからない、という人がいます。知性が大いにあっても世俗的なのです。

神/真理を理解するには、「勉強ができる」「頭がよい」と言う場合の知性とは異なる、別の種類の知性が必要です。それが、純粋な知性、ヴィヴェーカ　ジャラ　ブッディ（識別してできた知性：ヴィヴェーカはサンスクリット語で識別）という特別な知性です。その知性で初めて神について理解ができます。それは普通の知性ではできません。そしてその特別な知性を得るには実践が必要です。

しかし現代の西洋の哲学者の多くはこのことに同意していません。彼らは頭だけで真理を探究しています。彼らは実践をせず、頭だけで真理を理解したいのです。ですが心に名声欲、金銭欲、嫉妬、プライドがあるなら、そのようなもので心が不純なら、知性も純粋ではありません。それにサムスカーラもあります。また西洋にはレース・プライド（一例として、アーリヤ人はユダヤ人より上等な種族だという意識）が残っている可能性もあります。そのようなものがある心は純粋ではありません。その状態では真理を理解することはできません。

真理はTruthです。ですから自分もtruthに従わないとならない。そうでなければTruthを理解することはできません。毎日の生活において、心のレベルで真実、行動のレベルで真実、話のレベルで真実を実践しないと、真理（Truth）を悟ることはできないのです。それはそうではありませんか？　いつも一時的なものについて考えていて、話していて、それで永遠なる真理を探究したいというのはまったく矛盾した話です。インドでは「真理を勉強したいなら、必ず真実の実践をしてください」と言われています。会話のレベルで真実、心のレベルで真実、行動のレベルで真実、そうして心が清らかになると、知性が清らかになります。その種類の知性で、初めて真理の探究が可能になります。

**悟り（モークシャ）への道**

実践によって生活を変えることは好まないが聖典は勉強したい、その態度では悟ることはできません。聖典を勉強したら、手紙を捨てて買い物に行くように、実践という次のステップに進んでください。

**①シュルティ、ユクティ、アヌバヴァ**

真理や悟りについての証明には次の方法があります。①シュルティ（Sruti：聖典の勉強。聖典の言うことは何ですか？）、②ユクティ（Yukti：議論。議論をしてその結論は何ですか？）、しかしその2つでは十分ではありません。3つ目の条件が、③アヌバヴァ（Anubhava：経験による理解）です。自分で実践して理解したもの、それがアヌバヴァです。それら３つの方法が一致したら、それは本当に真理であるという結論になります。しかし、２つだけ、聖典をたくさん勉強してたくさん議論しただけでは悟ることはできません。実践が必要なのです。

**②シュラヴァナ、マナナ、ニディッディヤーサナ**

ギャーナ・ヨーガの実践では、シュラヴァナ（聞く＝聖典を聞く、聖典の勉強）、マナナ（考える＝聖典の論理を考える）のあとにニディッディヤーサナ（集中して実践する）があります。本の勉強だけでは不十分です。実践が大事なのです。

**スワーミージーとトゥリヤーナンダジーの経験**

スワーミージーもトゥリヤーナンダジーも皆そうでした。最初は十分に聖典を勉強して、そして実践をしました。ですが、精妙なサムスカーラを一掃することはなかなかできませんでした。

これはスワーミージーの話です。シュリー・ラーマクリシュナのからだがなくなった後、スワーミージーは巡礼に行きました。あるとき疲れたのでタバコを吸いたいという考えが生じ、歩きながらタバコを吸っていました。そして途中で会った人に「あなたもタバコを吸いますか？　タバコを貸しましょうか？」と聞きました。しかしその人は「私は低いカーストなので、いただくことはできません」と答えました。スワーミージーは「そうですか」と言って、再び歩き始めました。

低いカーストの人が高いカーストの人と同じものを共有するというのは一種の罪になる、という考えが当時はあったのです。しかしスワーミージーは考えた、「あれ、私は放棄をしました。ですがカーストのサムスカーラがまだ続いている？」と。この場合はプライドではありません、サムスカーラですね。

私たちの中にはいろいろな否定的な傾向がありますが、普段それは潜在意識の中に隠れています。スワーミージーは悟った方です。ニルヴィカルパ・サマーディも得た方です。ですが見てください、「彼はローカースト、私はハイカースト」というサムスカーラがあったのです。スワーミージーは突然それへの気づきを得て、そして識別して、彼の元に戻りタバコを差し出しました。

トゥリヤーナンダジーにも同じ経験がありました。若いころ、彼はヴェーダーンタの勉強に没頭していました。コルカタのガンジス川の近くに住んでいたときの話です。あるとき沐浴のためにガンガーに入ると、「ワニが出たぞー！　みな岸に上がるんだー！」という声がしたので彼は皆と同様に慌てて一目散に岸に走って逃げてました。次の瞬間、「あれ？　私はヴェーダーンタを勉強しているのだ。その教えは『身体がなくなってもあなたはなくならない』と言っているのだ。それなのにどうして私はワニを怖がって逃げているのだ？　ワニに襲われて身体が死んだとしても、それは身体だ。私は死なない」と気づいてガンガーに戻りました。ワニはいなくなっていました。

トゥリヤーナンダジーは気づきました、ヴェーダーンタをたくさん勉強したのに私はそれを本当に理解してはいなかった。聖典の勉強だけでは不十分だとそのとき初めて理解したのです。そしてガンガーに戻った。（笑い）それが特別です。このような見方は普通の人には理解できません。普通はその人は頭がおかしいと思います。ですがトゥリヤーナンダジジーはそれほど厳しい考え方をする人でした。

ですが彼の最初の衝動は「岸に上がる」でした。なぜなら身体と自分を同一視していたからです。この、身体との同一視もサムスカーラです。そしてサムスカーラを取り除くのは簡単なことではありません。スワーミージーやトゥリヤーナンダジーでさえ難しいことなのですから。

まず勉強して、そのあと実践して、そして実践のときにサムスカーラが問題になったり、堕落することがあったとしても、それを識別して実践を続けてください。実践して、また問題が出ても、また識別して実践を続けてください。

**シュリー・ラーマクリシュナの経験**

シュリー・ラーマクリシュナの元には、シュリー・ラーマクリシュナにどのくらいの聖典の知識があるか、それをテストしたいと思ってドッキネッショル寺院に来る若者もいました。「先生、あなたはパンチャダシ［＊ヴェーダーンタの書物］を勉強しましたか？」と聞かれると、シュリー・ラーマクリシュナはいつも、「その種類の本の勉強は悟りのために全く必要ない。それがなくても悟ることはできる」と答えました。勉強よりも大事なのは実践だという教えは『福音』の中に何回も出てきます。その一番の例がシュリー・ラーマクリシュナです。

2種類の悟った人がいます。最初聖典を勉強してから悟った人。そしてまず自分が悟り、後から聖典の内容と自分の経験を比べる人（聖典と一致したので悟ったと知る人）。この2種の例をシュリー・ラーマクリシュナは、果物で説明しました。普通は、最初が花、花の後ろに果物が実ります。ですが最初が果物、果物の末尾に花、という珍しいケースもあります（カボチャやキュウリなど）。「最初に果物、後から花」それを「まず悟って、それから聖典に照らし合わせる」自身の経験にあてはめて説明をしました。とても簡単でわかりやすい例ではありませんか？

コルカタの近くに、ガンジス川と海が交わる神聖な場所（ガンガー・シャーゴル）があります。遠方からたくさんの僧がそこに巡礼に行きますが、ドッキネッショル寺院では僧侶たちのお世話をしていたので、その噂を聞いて地方からの僧がたびたびやってきていました。そしてシュリー・ラーマクリシュナにも面会して帰りました。そのときの話です。

──『ラーマクリシュナの福音』p1044より

*「あるとき、リシケシから来ているひとりのサードゥがドッキネッショルに来た。彼は私に『なんという驚くべきことでしょう！私はあなたの内に５種類のサマーディを拝見します』と言った。*

*ちょうど猿が枝から枝へと飛び移って１本の木を登っていくように、マハーヴァーユ、つまり大生命力が、ひとつの中心から次なる中心へととび移りながら肉体の中を上昇していく。そして人はサマーディに入る。人は大生命力の上昇を、まるでそれが猿の動きででもあるかのように感じるのだ。*

*ちょうど魚が嬉しそうに水中をスッスッと泳ぎまわるように、マハーヴァーユも肉体の中心を上昇していく。そして人はサマーディに入る。人は、大生命力の上昇を魚の動きのように感じるのだ。*

*枝から枝へと飛び移る小鳥のように、マハーヴァーユは、いまはこの枝へ、そしてつぎにはその枝へと、肉体という木を上昇していく。人は大生命力の上昇を、まるでそれが小鳥の動きででもあるかのように感じるのだ。*

*アリがゆっくりとはって行くように、マハーヴァーユは中心からつぎなる中心へと上昇する。それがサハスラーラに達すると、人はサマーディに入る。人は大生命力の上昇を、アリの動きででもあるかのように感じるのだ。*

*ヘビが身をくねらせて進むように、マハーヴァーユは脊柱に沿ってジグザグに上昇し、ついにサハスラーラに到達する。そして人はサマーディに入る。人は大生命力の上昇を、まるでそれがヘビの動きででもあるかのように感じるのだ」*

マハ―ヴァーユとはクンダリニーという力（エネルギー）のことです。クンダリニーが、ムーラーダーラ・チャクラからサハスラーラまで上がるとサマーディに入ります。しかし私たちのほとんどは、下の3つのチャクラでそのエネルギーが停滞しています。つまり排泄、生殖、食事が中心の領域です。チャクラの話に興味がある人は多くいます。しかし私たちの９９％はその３つのチャクラの領域から上に上がることはなかなかできません。

マニプラからアナーハタに上げる実践が一番大変です。しかしアナーハタに上がっても、また下がる可能性はあります。アナーハタからマニプラ、スワーディシュターナ、ムーラーダーラへと堕落してしまうのです。なぜなら安定した状態ではないからです。アナーハタからヴィシュッダ・チャクラにまでのぼったら、だいぶ安定します。しかしサマーディにはまだまだです。その後、それまでよりもっと懸命に実践をして、次がアッギャー・チャクラ。しかしそれでもまだ悟れていません。やっと最後にサハスラーラまで上昇したら、サマーディです。しかしシュリー・ラーマクリシュナは、一日に何度もサマーディに入っていました。

リシケシから来ている僧は、特別な僧ではないと思います。彼は聖典を勉強してその中に書いてある5種類のサマーディを知っていて、それをシュリー・ラーマクリシュナが体験しているのを見た、と言いました。ですがシュリー・ラーマクリシュナ自身は聖典に書いてあるとは知らなかった。自分の経験が聖典に書いてあるとは知らなかったのです。これが最初に悟って、後で聖典と比べて自分の経験は正しいと知る例です。

**アドブターナンダジーの例**

勉強をしなくても悟ることはできる、その一番の例はシュリー・ラーマクリシュナです。しかしもっと高い例があります。それはどなたですか？　アドブターナンダジーです。彼は勉強できる環境には育ちませんでした。シュリー・ラーマクリシュナは「師の師」ですが、一度だけ教えることに失敗をしました。ベンガル語のアルファベットをラトゥ（アドブタ―ナンダジーの出家前の名前）に教えようとしましたができなかったのです。最終的にシュリー・ラーマクリシュナはあきらめて、「OKです。あなたはこれからも勉強しなくて結構です」と言いました。（笑い）アドブタ―ナンダジーが聖典を勉強するなど、まったく不可能なことでした。ですが悟った人でした。

インドの人々はバーガヴァタムなどの聖典がとても好きです。有名な学者が来て、同じ聖典を毎日毎日ゆっくりゆっくり、とてもおもしろい方法で、時には真似をして、時には歌って、皆でそれを楽しみながら、1週間、2週間、ときには1か月にも渡ってその講釈を聞くプログラムがあります（それは今でもあります）。あるとき、アドブタ―ナンダジーはシュッダーナンダジーとともにコルカタで催されていたカタ・ウパニシャドのプラグラムを聞きに来ていました。そしてカタ・ウパニシャドの一番最後の前の節（第3章17節）、

*「親指の大きさであり、内奥のアートマンである至高のプルシャは、あらゆる生類の心臓に永遠に住んでいる。葦からその髄を引き抜くように、真理の探究者は、大いなる忍耐をもって、身体からアートマンを引き離さなくてはならない。このアートマンは純粋で不死であると知れ──いかにも、純粋で不死である！」*［『ウパニシャッド』p65 2009年版］

を学者が説明し終わったら、アドブタ―ナンダジーは大きな声で「シュデール」──シュッダーナンダジーの出家前の名前はシュデールでした──「シュデール、パンディッティッボレチャ！」と言いました。パンディッティト　ティグ　ボレチャ。その学者の言うことは正しい、と。

この節が言っていることは何でしょうか？　たとえば、刀が収まっているさやをイメージしてください。さやは外のカヴァー、中は刀という１つのものです。今、同じことをという草について考えてみてください。葦の中には（この節ではイシカと言っています）が入っています。外のものはムンジャと言っていますが、それはカヴァーです。葦は中の髄をとることができる種類の草です。

同じように、すべての生きものの、中がプルシャです。その形は何ですか？　親指です。［＊と親指を立てて見せる］──これは瞑想のためのイメージです──それが中に住んでいます。プルシャとはアートマン、内なる自己、魂、ブラフマンです。それがすべての生きものの中に住んでおり、人間だけがそれを悟ることができるのです。まずこのことを理解してください。

ではどのように悟りますか？　葦をイメージしてください。葦から髄をとるように、からだというカヴァーからアートマンという髄をとってください。つまり、粗大なからだ、精妙なからだ、原因のからだからアートマンを識別し（それは「とる」という簡単なことではなく、識別するのだということをよく理解してください）、そのアートマンを悟ってください。それがこの節の助言です。

その学者はそのことを説明していました。するとアドブタ―ナンダジーは大きな声で「シュデール、パンディッティッボレチャ！」（学者は正しい！）と言ったのです。また５分位して、「シュデール、パンディッティッボレチャ！」、また「シュデール、パンディッティッボレチャ！」。シュッダーナンダジーは言いました、「マハーラージ、静かになってください。他の人の邪魔になります。他の人にはうるさいですよ」。それでも「パンディッティッボレチャ」は止まりませんでした。

そこでシュッダーナンダジーはその場所から出て帰ることにしました。帰り道でも「パンディッティッボレチャ！」は止まりませんでした。当時、二人はバララーム・ボシュ家の同じ部屋に住んでいました。夕方になっても「パンディッティッボレチャ！」、食事の後も「パンディッティッボレチャ！」、寝ても、「シュデール、シュデール」「マハーラージ何でしょうか？」「パンディッティッボレチャ！」シュッダーナンダジーは寝ることができなかった。（笑い）

さて、なぜそんなに「学者は正しい！」と繰り返したのでしょうか？　シュッダーナンダジーにはわかりませんでした。アドブタ―ナンダジーは後になってこのように回想していました。自分の経験と、聖典の言うことが一緒だったとわかったのだ。それがとても嬉しくて喜びでいっぱいだったのだ。

以上

・賛歌奉献「トゥマケ　チャラタ　ラーマチャンドラ」